

この意味に於て著者の勞を多とすると共に、此の機會を以て是迄隠れたる令の研究家であつた著者を學界に推奨したい。

註

古民部省式(令集解賦役令調庸物條所引)

古記云、問、遠近程若爲、答、依民部省式、近國十七、伊我伊勢尾張參河丹波因幡備前阿波紀伊讃岐近江三野若狹但馬播磨淡路國也、(近國十七として十六箇國を擧げたるは、伊勢の下尾張の上に、志摩の二字を脱したものであらう。延喜民部式には、山城大和河内和泉攝津伊賀伊勢志摩尾張參河近江美濃若狹丹波丹後但馬因幡播磨美作備前紀伊淡路の二十二箇國を近國としてある)中國十四、遠江伊豆相模信野越中駿河甲斐飛彈越前伯耆出雲備中伊豫備後國也、(延喜民部式には遠江駿河伊豆甲斐飛彈信濃越前加賀能登越中伯耆出雲備中備後阿波讃岐の十六箇國を中國としてある)遠國十六、上總常陸武藏下總上野下野陸奥佐渡周房石見土左越後安藝長門隱岐筑紫也、(延喜民部式には相模武藏安房上總下總常陸上野下野陸奥出羽越後佐渡石見隱岐安藝周防長門伊豫土佐筑前筑後豊前豊後肥前肥後日向大隅薩摩の二十八箇國及び隱岐對馬の二島を遠國としてある)

昨年の史學地理學界

序言

本號に於て特に此欄を設けし趣旨は、大正五年の我史學界並びに地理學界に於ける研究成果の總觀に便せんとするにあり。即ち過去一年間の斯界が如何なる方面に其業績を齎らし、や、如何なる問題を提供し解決せしや、將又如何の趨勢を來らんとする新歲に表示せしやを窺ふの榮となさんとするものなり。取材は主として、昨年中公刊の圖書雜誌新聞等に現はれたる諸般の研究業績の中重要なものと認めしものに限リ、講義講演等の非公開的のものは之れを採らず、而して本欄の記述は是等論著の内容又は其主意の存するところを嚴正忠實に摘録するに重きを置きて、此等研究事項に對する批評論議は力めてこれを避けたリ。たゞ本欄締切後に係る主要なる論著の多少、に漏れたるものあるべきは止むを得ざるところなり。

史學界

概況 昨年の斯界は其前年に於て見たる大典盛儀又は歐洲動亂に關する論著の如き特に其年に於て顯出するものなけれども一般史學界及地理學界は諸種の研究彌々進み從來の雜誌により諸研究

の公にせらるゝもの多く我「史林」亦此氣運に貢獻する所あらんこと、一月其初號を出し、次で「宗教研究」、「哲學研究」の如き特殊學科の専門雜誌の刊行を見此等誌上に於て亦史學に關聯する研究の發表せらるゝもの少からず、其他「國史叢書録」の發行は國史の知識を普及する上に盡すところあり。「歴川講座」が逐次、刊行せられて専門的研究の一般讀書界に歡迎せらるゝの風を助成し又地方史の編纂が大典念事業として、計劃せらるゝもの續出し、史學が一方に其研究の進境を見ると共に一方これに關する興趣の漸次深厚擴大するものとして斯界の隆運を語るにあらざるはなし。

史學一般 史學の理論上の研究は從來我國の史學界に於ては論著の最も少なき方面なりしが最近に至り注意を惹く傾向あるは斯界の爲め慶賀すべきところなり。大正五年に於て現はれ史學の性質に關する問題に於ては、先づ史學の知識に關するもの、一昨年以來、哲學界に於て認識論的研究の論著が頻出するに伴ひ、史學に於ても注意せられ來り、此の方面に於ては獨逸西南學派の所説が漸く人々の視聽を惹くに至りし如し。リツケルトの「認識の對象」が中川得立氏によつて邦譯せられ、同じく「認識の二途」も此譯書に收められ、哲學雜誌に於ても宮本和吉氏によつて綱要を傳へらるゝに對し、社會科學の方面に於ては、「經濟哲學の問題」(左右田喜一郎、哲學研究)に其の主張が宣傳せらるゝあり、而し

て又リツケルトの代表的著作なる、Grenzen der Naturwissen schaftlichen Begriffsbildung に於ける歴史學の性質が「リツケルトの歴史學の觀念に就て」(安部晴之助、哲學研究)に於て評論せられ、彼れが、自然科學は其世界を一般性に於て捕捉し、個性特殊性は其研究の對象となり得ず、之れに反して歴史學は個性の研究にして、無限の個々を價值に關係せしめ撰擇して眞の個性として之を其研究の對象とすとして、學問の二大分類を成したるに對し、此の分類は種々の批難を招くべきことを指示し、就中、歴史學の觀念に於てはリツケルトが個性化的見方と歴史學の見方とを同一視するのとの不當を説き、普遍と特殊とは相對的概念なるを以て普遍認識は決して特殊の現實を離るものにあらず、故に實際の認識は普遍的認識なると同時に特殊の認識ともなるものなり結局リツケルトが個性研究即ち歴史的研究なりとするを止めて、歴史以外の個性的研究の爲めに其成立の餘地を残すべきこと、特殊研究と一般性研究との間の統一の可能性を説きたり。而して此の問題に關聯するものは「歴史とは何ぞや」(夏山茂樹、歴史地理)にして、歴史の觀念の發達をさき、ギンデルバントの歴史學が名は歴史によりたるも其性質は特殊研究の代表語たるにありとし、而して歴史の知識は「かくある」(Allseco)にあらずして「かくあるべし」(Sollen)の規定をさるべきものとし、デイルタイ

の此問題に關する批判を世に紹介せんも務め、若し將來「かくある」と「かくあるべし」とが同じ價を持つならば人の目的は歴史より得らるべしとしたり。此點は又歴史の合法性を論じたる「唯物史觀と歴史法」(藤井健治郎、史林)と相對照すべきものにして、マルクスの唯物史觀が因果的必然或は自然必然の合目的性との間の矛盾に陥りたることを擧げて、歴史を自的必然に見るに於ては唯物史觀は失敗なり。然れども目的論的に於ては成立し得べきにて、歴史法の概念は、目的論必然的に見るに於ては成立し得べき概念なりとしたりは、注意すべき議論なり。又特殊歴史の性質を論じたるものに社會史論(綿貫哲雄、東亞之光)あり。社會史を社會生活の起原より其變遷の跡を尋れ、其性情特質を考察するものとす社會力と其因果關係の探究を其目的としたり。又歴史考察法に於ては近年社會心學派の主張が我國にも漸次認容せられ來り此派の巨星ラムブレンヒト氏の逝去を機として一昨年來ラムブレンヒトの史觀の紹介ありしが昨年にては「ラムブレンヒトを憶ふ」(坂口昂、史林)の委曲を悉くせる外「文化發展の心理學」(桑原芳藏、心理研究)がラムブレンヒト氏の *Moderne Geschichtswissenschaft* 及び *Einführung in das historische Denken* 等に依りて文化發展の心理的過程を論述せる、或は「主觀主義」(桑木嚴毅、哲學雜誌)がラムブレンヒト氏の文化時代區分及び其一なる主觀主義時代なる

研究に言及せる等。又以て此方面の興味が史學のみならず哲學心理學等我國の學界に與ふることの大なるを察知すべし。同時にこの *Moderne Geschichtswissenschaft* 其英譯より、國語に翻譯せられたる「近代史學」早崎信、心理研究は、此のラ氏の思想の流布の上に於て注意すべきものなるべし。ラ氏と並び相傳へらるものにヴェントあり。「精神科學の基本問題」(上野直昭、哲學叢書)は彼れの「論理學」に依憑せるもの、「民族心理學と美學」(大西克禮、心理研究)と共に史學の問題に入り來る所多し。史學が他の學科と如何なる關係に立てるかに就ては、「史學地理學と他の諸學科との聯絡關係に就きて」(内田銀藏、中等學校地理圖史教員協議會議事及講演速記録)が、一般に一學科の他學科との聯絡關係は、學問上研究上の聯絡關係と、教育上教授上の聯絡關係とありとし、又何れも更に一は過去に於ける歴史上の關係、二は現在に於ける實際上の關係、三は道理上必然存せざるべからざる關係のあるを説き、史學と關係ある主要諸學科を六類に分ち、地理學と聯絡關係ある學科を十種に分ち説明せるあり。而して又、歴史が綜合的研究に漸次向へること、一方、社會學の進歩につれ史學と社會學との關係の親密を増すにより、此二科の關係は早くより注意せられつゝありしが、昨年度に於ては「歴史哲學と社會學」(田中一貞、三田文學)があり前掲「社會史論」亦此問題に觸る、所

あり、田中氏の論旨は、歴史哲學が單に歴史事實に對し科學的、哲學的説明をなし、社會學原理を應用するものならばこゝは社會學的歴史と稱すべく、若し社會の普遍抽象的法則を求むるならば社會學と同性質となる。但し其對象が時間的に制限せらるゝため、社會學の一部たるに止まるものとせり。

史學史研究として見るべきは「支那に於ける史の起原」(内藤虎次郎、中等學校地理歴史教員協議會議事及講演速記録)にして、其の内容は支那に於ける史官の研究なれども亦史學の發生する意義を考ふるの料とすべく、「時代の趨勢と史家の任務」(坂口昂、史林)も近世史學の發達と其背景たる時代との關係を回顧しつつ、現時の大變亂期に際する史家の覺悟を説きたるものなり。(西田)

〔國史〕 大正五年の國史界を回顧するに、先づ一般史時代史に於ては早稻田大學出版の「訂正増補大日本時代史」十二冊の完成を擧げざるべからず。此書は前版の發行後重要史料の新に發見せられたる史論の訂正を要すべきものありとにより、改訂出版したりしものにして、正に昨年に於ける大部出版の隨一となすべし。

「日本近世史」(中村孝也)は其第一卷「社會分裂の時代」を出したり著者は千五百四十三年(天文十二年)の葡萄牙人の漂着に、重大なる意義を認めて、我近世史の起點をこゝに採り、葡人の渡來に基く貿易の發達と天主教の傳播とが社會分裂の狀態にありし我國に

及ぼせる影響を述べ新時代勃興の機運を觀察して、時代の禍亂が因襲の尊重と個性發揚の時代を現出したりとなし極端なる地方分權より大なる國民統一に向ふ史的現象を從來の學者の研究を綜合して巧みに叙述せり。次に各時代史實の研究に移らん、「本邦上古の戰國」(大類伸、考古學雜誌)は上古に於ける戰國が地形の險要に據りし山地戰・險地戰にして、沼澤・森林の如きも亦大に利用されしも、武器の効力は認められず、詭計に依りて奇襲を試むるを能事とし、神武天皇東征後は第宅官廳を利用して、臨時築城の發生となり、稻城・石塞等現はれ、放火が唯一の攻撃法なりとこゝを説けり。「丹慶天皇御即位に就ての研究」(八代國治、史學雜誌)は、帝系圖、古寫本新葉和歌集奥書、嘉喜門院集袖書、帝王御系圖、人王百代具名記、及び新に發見せられたる畔雲千首奥書等を巧みに利用してあらゆる各方面より長慶天皇御在位を主張し、其御在位期に就ては新集の示せる弘和元年の御在位を更に延長して同三年までと推定したるものにして、御在位肯定說側に取りては最も有力なる研究とす。「後北條氏民政史論」(牧野純一)は後北條氏三代の施政の周到なる用意と、其關東既往の歴史が與へたる感化とを説き、「田沼時代」(辻善之助)は田沼意次が政治上の大手腕を具へながら高遠の理想なく、政治的良心の缺乏と、徳望の伴はざりしに依り一代の政治を過らしめたりと説く、「東京奠

部の真相」(岡部精一、歴史地理)は勝所藩士高橋作也の遷都論を
始めとして、大阪遷都論、東京遷都論を列挙し、大阪巡幸、東京
遷都に至る徑路を詳述し、「徳川氏の處分に就て」(同人、史學雜誌
)は明治維新に際して時の新政府が徳川氏の宗家を分せんとい
ふに當りて、隱微の點にまで外國の力の働けるは明治元年三月十
五日に決行さるべき江戸城總攻撃が西郷・勝の會議の結果中止さ
れしが如きも其裏面には英國公使パークスの態度の官軍に不利益
なりしによりし一例にても知らるるといへり。

更に眼を轉じて對外關係を見るに「應永の外寇」(三浦周行、史料)
は應永廿六年の外寇に於ける來寇者は朝鮮のみなりしに、蒙古・高
麗・兩蠻の聯合來寇説を生ぜし由來を明かにし、埃題持絶註進狀の
史料としての價值を批判して、其前半が事實に近きものあるに拘
らず後半は廣田社家の註進に依つて假托せられし跡ありとし、
宗貞茂の外寇以前に死去せることを明らかにして宗家側史料の不
備は朝鮮側史料に數齣を輸すにせり。これと關聯して見るべき
ものに「應永の博多津に關する史料」(藤井甚太郎、歴史地理)あり
老松堂行錄を紹介し、其應永の外寇に關する一貴重史料にして、
當時九州探題治下に於ける博多津の有様を見るべしといへり。博
多につきては「博多津沿革に關する」(私見中山平次郎、同誌)は博
多市街が上古に於ては現今よりも一里許の内方にあり、靈樂時代、

洞窟館の建設に作うて今の博多に移りしならんといへり(「徳川時
代に於ける日本と暹羅との關係に就きて」(内田銀藏、續史的研究)
は暹羅使節の來朝、邦人の暹羅渡航、寛永鎖國後の暹羅國船の渡
來兩國間の貿易品等を敘述して兩國人種の關係に及べり。「元和航
海記の研究」(川島元次郎、續史的研究)及「徳川初期の海外貿易家」
「同人」は并びに我近世の初期に於ける對外關係史上の一部の消
息を傳ふるに力め、「天明時代の海外思想」(新村出、史學雜誌)
は日本側及蘭人側より見て安永・天明時代に於ける邦人の海外に關
する智識の發展せる徑路と蘭人の我國に關する研究の進捗したる
由來とを明らかにし、「安永以前松前藩と露人との關係」(河野常吉
、同誌)は(松前藩と露人との關係既に樂幕府及世上有志の露人南
下の事を知りし以前に起りながら、松前藩が對露策を謀せざりし
藩内の事情を詳らかにしたり。

次に傳記及び人物評論の方面に於ては、「黒田如水傳」(金子堅太
郎)が如水のよく機微を識り禍を轉じて福となすの手腕を有せる
英傑なりと稱揚せるあり、「光悅」(光悅會編纂)が光悅の藝術的
天才の一生を詳叙せるあり、「壺井鶴翁に就て」(林森太郎、史料)
は近世有職學に於て、學究的態度を以て斯學を開き、幾多の故實學
者を其間より出せる功蹟を説き、馬琴と北齋(藤井乙男、藝文)は
其配、經歷、地位及び健筆多作にして自信強き事に於て相如き、

而かも我意強き前者と負けぬ氣の後者との間の提攜が衝突に終れるは避くべからざるも兩者の心中にては互に相惜しみを叙す。

また「征西將軍宮を讀む」「三浦周行、史林」は一昨年出でたる同書に對して嚴密なる批判を加へしものなり。しかも昨年に於ける傳記研究の對象に佛者の多かりし事は注意すべく「日本天台の元祖道遠に就て」(羽溪了諦、六條學報)は、傳教よりは少くとも十數年早く入唐したりし乾淑の撰なる「道遠和上行迹」により道遠の事蹟性行を明かにし、彼れの思想が從來の天台法門と著しく其趣を異にせるを述べ、傳教の圓・戒・禪・密の四宗融合の天台宗が其の開立の暗示を奈邊より得しかを説き、「慧心僧都と法然上人」(望月信亨、宗教界)は、叡山に行はれたる常行三昧の念佛に其思想の淵源を有する慧心の淨土往生の思想が、往生要集製作の時代に實相理觀より正修念佛の説に入り、法然は寂空より要集を傳承せしも、其四種の要行を捨て口稱專修を重んじ淨土門を始めしとす「法華經行者日蓮」(姉崎正治)は鎌倉時代の佛教界を概説して、法華經行者日蓮の生涯を、序分、正宗分、流通分の三區劃の下に記述せるが、其中、身延入山の理由は、三度諫め用ひられざりしによるとせる從來の通説を排し、重大なる懺悔滅罪と理想成就にありしとせるは、他の日蓮傳に比し明かに一步を進めんとせる努力を觀るべく、これと併せ看るべきものに「罪に關する日蓮上人の懷

抱」、同人、宗教研究)あり、日蓮の身延退隱までの心理的發達の迹を尋れ、てこれがの動機を暗示したるものなり(大僧正天海(須藤光暉)は、近世劈頭の傑出したる生涯を詳述し、附録考異の條の如き精密なる考證を以て、天海の出自に關する流布説を考證し、彼れを荏苒氏の出と斷定せり。これと參照すべき研究は天海の蒐集せし書籍に關する「天海大正集の支那史籍に就て」(古谷清、史學雜誌)及び「日光山慈眼堂經藏收納の典籍」(同人、考古學雜誌)あり。「遺物上より見たる鎌倉足利時代の日光山」(同人、同誌)は同山が將軍家及び其御家人なる此地方豪族の信仰を受けて繁榮せし事を言へり。

次に各種文化に關するものを見んに、第一法制經濟の方面に於ては「憲法十七條に就いて」(岡田正之、史學雜誌)は、其發布の年代が織緯説によりて甲子なる推古十二年なりとし、十七の數は陰陽の極數を合せたるものにして、其内容は法家の思想に淵源する所なりと説き、「聖德太子の十七條憲法に就て」(黒板勝美、東亞之光)は其思想に佛教、老莊、儒教三分子の含有する、事を認め、此憲法が發布さるゝに到りし理由は、氏族制漸く弛みし當時に於て、新に輸入されし國家統一思想の深く太子に受け容れられし結果なるを以て皇室中心思想に充溢せりとす。「日本古代の追放刑論」(三浦周行、京都法學會雜誌)は我中古法及其母法たる唐律に

は、追放刑の存せざりしに武家時代となりて採用されしを指摘し、江戸時代に入りて本刑存廢に關して將軍吉宗、松平定信、水野忠邦等大に改廢する所あらんと試みながら遂に果せりしも、刑法秘密主義の江戸幕府が本刑に對する討論に委曲を盡したりしことを異數なりとせり。「下司と地頭とに就て」(魚澄總一郎、歴史地理)は地頭と下司とが本來其性質を全く異にせるものなるに拘らず、此兩者の密接するに至りし事は、武士が經濟上に於て實力を寛宥するに至りし徑路を示すものなりと説明し、「對馬の土地制度について」(牧野信之助、同誌は對馬に於て)は、文十一年百姓と耕地との權衡を取るために、一旦各村全體の土地を引上げ、更に之を百姓數に均分し、多少の餘裕を存して共同耕地となしたる事の當時に於ける他諸藩の土地割制度と著しく異なるを指摘せり。皇室御領につきては、徳川時代に於ける皇室御料と其分布(藤田伊人、同誌)は、慶長以來の皇室の御料地が溪谷の間に介在する寒村不腴、沙石筆滴の地を以て充てられしを注意し、「皇室御領と氣比神宮」(八代國治、同誌)は、氣比神宮領たる氣比庄以下十七庄が三代起請地として八條院領となり後醍醐天皇に傳領され建武以後改滅せしを説きたり。「座の研究」(三浦周行、經濟論叢)は新に發見せられたる史料によりて主として地方の座に關する研究を試み戰國時代に於ける座の商業史上に占むる位置を

明かにせんことをものにして、未だ完結に至らず。徳川時代の數學者本多利明の經濟觀を中心としたるものに、「本多利明の船舶論」(内田銀藏、海國公論)、及び「本多利明の經濟說」(本庄榮治郎、經濟論叢)あり、前者は主として利明の著、長器論其他に據りて、國家の長器は船舶にありとなし船舶建造、遠洋航海獎勵の必要を説けるを言ひ、後者は其海運官營、外國貿易開始以下の諸論のメルカンチリズムに類似してしかも更に卓見あるを言ひ、其思想の支那學說と言はんよりも寧ろ西洋思想の影響多く、徳川時代經濟學者中最も傑出せる地位を占むべきを論ぜり。徳川時代の人口(同人)同誌は、此時代に於ける全國人口調査の經過を説きて人口を表示し、幕府の都市人口集中に對する政策は始め消極的に歸郷者保護に止めたりしが、天保十四年に至りて改めて積極的に人返しの方法を實行し、人口の充實を計らんとせり言へり、「支那及び日本の人口論」(瀧本誠一、同誌)と併せ看るべし。此方面の著書に「大寶令新解」(窪美昌保)あり、大寶令を平易通俗的に解釋し、現行法制に當て、説明せるものにして、「法窓夜話」(穗積陳重)が、古今東西に亘り法律に關する逸話を多く收めたると共に、沙溪のオアシスの感なくんば非ず。宗教方面に於ては「真宗全史」(村上專精)は室町時代末葉以來我民間に於て大なる勢力を有する真宗が歷史上疑惑の裡にあるが如き觀あるに對し、信仰的態度よりも、

研究的態度に出で、眞宗の諸種事項に亘り歴史的記述を試み、「平安朝佛教史上に於ける中尊寺の地位」(辻善之助「羽沿革史論」)は藤原清衡が上方文化を奥州に移植する理想より考へて、文化史上、佛教史上に於て京洛の寺院よりも中尊寺・毛越寺の重大なる意義を認めんとし、「信仰上より見たる頼朝・尊氏・家康」(同人「禪宗」)は該三者の中特に尊氏の信仰を論じ、從來の尊氏觀の誤を辨じ、「神道史上に於ける辨財天附字寶神の事」(清原貞雄「歴史地理」)はもと河を神格化せるものなりし辨財天信仰が、變じて財寶の神とせられ、七福神の一つとして信仰せられしは足利末頃より起りたるべく、辨財天と蛇との關係は全く我國にて發生せし信仰なりと「日本に於ける龍蛇の信仰」(同人「國學院雜誌」)及び「日本に於ける北辰北斗の信仰」(同人、史林、は其由來の支那思想、佛教思想より來り、陰陽道によりて助長變更せられし事を語り、「大黒天考」(長沼賢海「史學雜誌」)も大黒天はもと印度の神なれども、我れにありては鎌倉時代に至りて其信仰や、現はれ室町時代以後普及して民族の信仰となり、本來の惡魔を調伏する善法外護の神は、福壽を授くる神となれりと説けり。宗教關係と關聯して記述すべきは東大寺問題にしろ、「東大寺と大和國分寺、附金鐘寺の疑問」(喜田貞吉「藝文」)は東大寺が天平廿年の頃ほゞ成立せりとし金鐘寺と國分寺とは交渉のものにして、金鐘寺は東大寺の前名

に過ぎずと言ひ、東大寺大佛殿佛前版文の記事を疑ひ、東大寺要錄所收天平十四年七月十四日の官符を偽作なりと斷ぜるに對して、「東大寺草創考」(小野玄妙、宗教界)は、前者が續紀の記事を過信せりとて其所論を駁し、東大寺は天平十三年二月十四日發願、天平勝寶五年一月十五日成就せりと論ず。更に思想の方面には「文學に現はれたる我國國民思想の研究、貴族文學の時代」(津田左右吉)は、平安朝期に於ける悲哀の空氣、厭世思想、神秘的及道德的傾向を描きて萎縮したる國民思想を觀察し、最後に於て、武士の思想の社會表面に現出したるし事に一瞥を與へ、武士道の對人關係たる事を言ひ、「三河物語の武士道」(原勝郎「藝文」)は、三河武士は譜代關係に立ち主従の間に長き親しみの存せるありて仰慕、撫愛の念は特に著しく、君臣共に逆境にあつて具さに辛苦を嘗めたりし事は三河道士道の發達に與りて力ありきと言へり。更に眼を轉じて文學・藝術の方面を見るに、「佛像の美術史的研究」(松本文三郎「哲學研究」)は、希臘の影響を受けたる犍陀羅式美術に於て佛像は初めて現はれ、純印度的の毘多式美術は支那造像の上に大なる感化を與へたりとて、我國美術に於て此兩式美術の影響ある事を認め、其分野を明かにせんとして、「法隆寺金堂の壁畫に就て」(瀧精一「國華及考古學雜誌」)が、毘多式の影響を擧げて殆んど犍陀羅式を認めざらんせり。而して後者が法隆寺金堂

の壁畫の四佛八菩薩は鎌倉時代に改作補修せられ、四佛は即金光明經の四佛なりと斷じ、西域的感化が我國に及びしは印度直接に非ずして、隋末唐初の尉遲の流義を傳へしものなるべく、此壁畫の描かれしは和銅の頃まで引下げ得しなるは、「印度藝術の東亞に及ぼせる影響に就て」(同人、國華)に現はる、思想と相啓發する所あり、而して前者は、「清涼寺釋迦像に就て」(松本文三郎、史林)に於て、此釋迦像の原像は決して犍陀羅佛像又は之を模したるものに非ずして趨多式なりとし、且該像の手足及顔面は我國にて補作せられたらん事を説けり「寧樂朝以前に於ける彫刻の形式に就て」(濱田耕作、國華)は、我國古代の彫刻は其材料に限定せられ、埴輪土偶と石人の手法とに於て見る如く棒狀と板狀との原始的系統ありしが、飛鳥朝佛像彫刻は石窟彫刻を傳承し、白鳳時代に鍔金像の手法を傳へて、初めて薄衣衣紋の醜れるを表現し得るに至り、寧樂朝期に至りて各種形式は融合し、本彫は國民的彫刻として發達せりと説き、「神宗の興隆と本邦の肖像畫に就て」(澤村事太郎、同誌)は、神宗の教義上、傳統の證契として頂相を與へし事の特に宋元時代に行はれ、非禪僧の頂相を傳來するもの鍔倉時代以降漸く多く、他宗高僧の肖像が理想化され行く傾向に對して、人としての面目をよく發揮せしが、其掛眞の儀式は此種肖像畫の出現を促し、客觀的に確實性を有し、主觀的に深刻なる肖像畫

が神宗の精神的方面に感化せられ、其隆盛と結合して發達せしを説き、其他獨創的氣分に満ちたる奇才光琳の師を、當時京都在住狩野門家中の諸々たる法橋素軒なる事を斷じたる「光琳の師としての山本素軒」(福井利吉郎、藝文)及び、眞の花壇を遠見する心地すまか、障子に映る影と評されたりと彼の作品を論ぜる「明治以前に於ける宗達光琳畫の鑑賞」(同人、同誌)あり。「關書譯局の創設」(新村出、史林)は、普通其創設を文化八年と言へるを排し、同年は譯局の事業が一段の進捗を示せる年にして、其創設は享和三年又は翌文化元年のラランデ曆書取調の事業に置くべしと説けり、風俗の方面に於ては、「藤原時代の容儀服飾に就て」(江馬務、同誌)は、當時に於ける男女の髮風、化粧、冠、服、女裝、を説明し、當時の容儀服飾の由來は唐風にありたりと雖も漸次藤原氏の好向に適應せる風俗と醜化となりと言ひしは、「藤原式服飾成立の年代について」櫻井秀、史學雜誌が、唐風を範とせし服飾界が、遣唐使廢止以後漸次國民化し、花山・一條の頃に國風服飾成立せりとし、一服飾品の生命にさへ略定れる律則の反映あるを例証せしと共に觀るべきものにして、「皇太子の御儀服について」(宮地直一、歴史地理)が、黃丹の御袍、空頂黑幘にて説明せるものは、「平安朝以降の立太子禮について」(櫻井秀、同誌)が立太子禮の式次を説明せると共に、時機に投じて現はれしものな

り、「室町時代に於ける女裝の起原と竹向日記の服飾史的價值」(同人、考古學雜誌)は、女裝研究上の史料としての同書の價值を認めたり、民族に關する研究として、「日本太古の民族に就いて」(喜田貞吉、史學雜誌)は、天孫種族が先住土著の住民を従へ、後の移住者を悉く收容・同化せる一例として、蝦夷を征服するには夷を以て夷を制する方法を用ゐて之を馴致し、同化せしめたる事は、國民全體に勇往邁進の氣風を養成せりと言ひ、「蝦夷の馴服と奥羽の柘植」(同人、奥羽沿革史論)はこれに關聯せり。「遺物遺蹟上より見たる九州古代の民族に就て」(同人、史林)は此地方に朝鮮・滿洲と連絡あるもの、隼人・倭人系のもの、及びアイヌ類似のもの、三様の遺物遺蹟ありとし、「倭人考」(同人、歴史地理)は熊襲は肥人と併せ考ふべきものにして、此兩者の間に類似點を多く有すとし、隼人が異族と認められしを説きて未だ完結に至らず。

歴史地理に關して都市を論ぜるものに、「都市の意義及成因」(阿部秀助、歴史地理)あり、都市は文明の火の消えざる所、國民文化の最高點にして源泉たる所なりとし、其成因は自然的狀態の外、各國民の人文的・經濟的事情に左右せらるべきを説けり。「本邦古代の都市に就いて」(喜田貞吉、同誌)は、古代に於ける都市は、帝都、地方廳所在地、市場、宿驛、社寺を中心として成りしが、今日文獻上其實狀を知る事難しとし、「桃山時代と城下町」(大類

伸、同誌)は領主權發揮の此時代に於て、城郭と城下との關係は極めて親密にして、此種の都市は城郭を中心として放線形を採りて發達し、領土經濟の中心として領内の開發に努力したりしを以て鑛山採掘盛んとなりしが、また一方に於て城下が純然たる商人町に化したるも此時代の現象なりと言へり、「小濱港の研究」(三浦周行、史林)は我中世史の後期を飾れる都市商港の發達の一例として、武士出身者が町人となり、商業の中堅たりし小濱港の發展が、堺港と同じく南北朝の戰亂を起點とし、間居業が其生命たりし事を論證せり。交通に關するものに「日本交通史論」あり、故藤田明氏の遺稿に附するに「本邦太古の交通」以下十五篇の論説を以てす。遺蹟に對する研究としては「梵釋寺とその寺址參考地」(喜田貞吉、歴史地理)は天津の舊京にありし梵釋寺の崇福寺と相提携して特殊關係あり、其草創は、佛教興隆と天智帝以後歷代の追福との爲めなり、其位置は三井寺の北にして崇福寺緋崎間よりも、韓崎に近き距離の所なるべきを以て滋賀村字カニカトウ附近ならんと推定せり。昨年來の係争たる多武峯墓に關する論議は、「多武峯墓に就きて谷井氏に答ふ」(喜田貞吉、考古學雜誌)に於て、多武峯墓は鎮足のにして、不比等墓は佐保山堆岡にありとなす舊説を、猪俣關白記の記事によりて立證し、更に「藤原鎮足及不比等墓所考の追考」(同人、歴史地理)に於て前説を繰返す所あ

り、「再び多武峯墓に就て」(本多辰次郎、同誌)は多武峯墓は元來不比等なりしが、鎌倉時代初期頃には、鎌足之墓と信ぜられしなりとて變換説を提出し、「再び鎌足及び不比等の墓所に就いて、附冬嗣及び基經の墓所に就いて」(喜田貞吉、同誌)は更に前説を反駁したり。地方史としては先づ「名古屋市志の完成に指を屬すべく、史論に」(奥羽沿革史論)あり。大日本地誌大系の刊行益進みて「三國地誌(上)」(攝陽群談)「斐太後風土記(下)」(木曾路名所圖繪)を出し、京都叢書は「都名所圖繪」、「拾遺都名所圖繪」、「雍州府誌」、「日次記事」等を出せり。又「古版地誌解題」(和田萬吉)の出版ありき。最後に言ふべきは史料の發見及刊行なりとす、新に發見せられたる馬場正通の一遺著に就きて「(内田銀藏、國民經濟雜誌)及「馬場正通の生涯及其著書」(補遺)(同人、藝文)、は正通の遺族なる馬場三郎助氏が發見せし長夜餘論の草稿について、其所説を紹介せり。『觀音寺文書について』三浦周行、史林)は江州代官と湖水舟奉行たりし觀音寺の、戰國時代に於ける世俗的活動と其業内とを同寺の文書によりて研究し、「兵範記に就いて」(西田直二郎、同誌)は自筆本兵範記の由來、性質、紙背文書に對して考究せり。「隆寛律師の法然上人傳」(非木直良、六條學報)が高野山中院御坊の庫中より發見したる百萬遍知恩寺第廿三世眞譽上人の書寫に係る法然上人秘傳には、律師隆寛撰と明記せるありと言ひ、「鎌倉時代

の二大佛教史家に關する疑問についての斷案」(大塚德城、禪宗)が碧山日錄不二遺稿の記事は中傷的性質ありとし、虎關師練の元亨釋書は凝然進びに固山一證の草稿によりて編纂せりとの説を排し、該書編修に際し凝然の撰述が參考に供されしやと疑へり。「丕揚錄解題」(幸田成友、史學雜誌)「難波雀類書考」(岩橋小彌太、歴史地理)及「薩州刊書考」(武藤長平、同誌)「解題叢書」(國書刊行會)はまた以て史料に關する研究の乘たるべし。更に史料の刊行されしものを列舉すれば、「大日本史料」六之十四、八之三、十二之十八、「大日本古文書」幕末外交關係文書ノ八あり、「中右記」水左記「帥記」山槐記「は史料通覽」として刊行され、「國史大系本類聚國史」と共に最も注目すべきものなり。「國史叢書」は「古郷物語」「大友公御家記」「從道鑒五代記」「安見太平記」「芳野拾遺物語」「千葉傳考記」「武田三代記」「甲亂記」「關原軍記大成」を主なるものと、日本偉人言行資料「は銀臺遺事」「立花遺香」「利家夜話」「命期集」「有斐錄」「先哲叢談」等を、「國書刊行會」は前記の群書解題の外に「群書備考」「近世佛教集說」「田能村竹田全集」「江戸時代文藝資料」を刊行したり。「皇位繼承編」の辭刻「蒙古襲來繪詞」の刊行等また附記すべきものなり。「中村」朝鮮史に於ては、先づ全般に亘るものとしては、「朝鮮史の槩」(今西龍、史林)朝鮮史研究者の爲めに必讀の書籍を解題せるものに

して、解説の史書中には著者研究の成果を含む。歴史、地理、方面の研究として「文祿の役に於ける加藤清正進軍路の一部調査」(小田省吾、朝鮮叢報)は加藤中韓進の地點を寶山驛とし此の轉進地點に至る迄は義州に向ふ本街道を通過せずとの舊説を排して轉進地點を安城驛とし、進路は本街道を採りしことを論證せり。「眞平郡考」(今西龍、史林)は從來朝鮮學者の間に眞番を以て黃海道平山に擬する説と滿洲内に求むる説とありしも確證無く、日本の學者間にても治所を鴨綠江の上流地方に擬する説、漢代の蒼海郡を朝鮮の眞番國ならんとする説等あり、又清の楊守敬は在南市説を主張したりしが、此の研究に於ては朝鮮の南方に在りしことを論證し、恐らくは忠清道及び全羅北道に置かれしものならんと推定したり。諸般特種なる問題には「朝鮮に於ける黨争の原因及當時の状況」(河合弘民、史學雜誌)は朝鮮の黨争の決して今日の思想を以て説明すること能はざるを前提して、黨争の初期は普通燕山君時代に於ける儒派非儒派の争に發せし云へる説を排し、國初以來の社會經濟の狀態が鮮人をしてかゝるに争を爲さしむる原因となりしを論證せり。「朝鮮寺刹の研究」(高橋亨、東亞研究)は朝鮮佛教に於ける伽藍と之に住居する僧侶の生活を研究し特に伽藍を僧侶の常住所即ち家として觀察せんとし、其の特色として、多く深山幽谷に存在し、檀家の皆無にして寺有財産の收入によりて維持し

日本の寺院に比して曼荼羅繪に富み、宗派の色彩鮮明ならず、道教の影響を受けしこと多きことを擧げたり。「朝鮮語廊の名稱及新羅王號麻立干考」(清水元太郎、藝文)は麻の朝鮮名を音を調査して、今の音サムは西紀六乃至八世紀に於て既に新羅疆域の一方方に存せざりしやを疑ひ、南鮮の方言に麻骨を麻立又は肋立と呼ぶより新羅の王位號なる麻立干の獨り新羅の方言たるのみならず、百濟に於ても通用語たりしと認むべしとし、「朝鮮の語學者崔世珍」(小倉進平、東洋學報)は四聲通解以下の語學書を著したる朝鮮第一の言語學者崔世珍の偉大なる事業と見識とを叙せり。朝鮮の歴史地理の研究は昨年一月より南滿洲鐵道株式會社が東京帝國大學に其調査部の事業を委託し、既に「朝鮮歴史地理研究報告」二冊の發表あり。朝鮮總官府に於ても昨年來朝鮮半島史の編纂を企て、又之に附隨して朝鮮人名彙考をも編纂することとなり、三浦黑板兩博士今西學士等を其委員とし、荻山學士等の執筆にて著々進行中なりと聞く。而して日鮮關係の新史料(大阪毎日)聞は此公務を帯びて朝鮮に出張せる三浦博士が研究の一端を傳ふるものなり。

〔那波〕

東洋史 先づ支那の文化史及び其の研究、方法としては、「支那上代文化史の研究法に就て」(後藤朝太郎、史學雜誌)は専ら支那上代の文字が一種の記錄として價值を有せることの史學研究法上注

意すべき點なることを指摘し、文字によりて支那古代の建築、宗教、軍事、乃至、經濟、政治等の諸方面の事情を窺ひ知るに足るべきを云ひ、支那一般論として「支那の將來」(井上哲次郎、東亞之光)「支那時局觀」(白鳥庫吉、東洋學報)あり。又「消夏漫筆支那」(中山成太郎)は、ニコラウス、ホスト氏の報告、グレンヘルト氏支那海濱殖民地論、フランケー氏東亞新氣運等より抄譯せるものにして、支那一般論 支那に於ける法港殖民地、居留地、獨逸に於ける支那研究等あり。「支那俗文學史研究の材料」(狩野直喜、藝文)は社會の裏面を研究せむとするに當り此の方面研究の必要なるを云へり。支那に於ける宗教に關して、「支那に於ける天主教の保護權に就て」(矢野仁一、史林)は支那の典禮問題と合して一大紛擾を宗教界に惹起せしのみならず佛國が自國保護權を完成せむとして葡國を排し、並に獨逸が之によりて山東に勢力を樹立したる等、外交政治史上にても看過すべからざるものなるを説き、「唐小説杜子春傳と祆教」(原田淑人、東洋學報)は小説に現れたる祆教を研究し、子春に錢を與へし老人の波斯人ならんことを、唐代の祆教が道教の假面を蒙りて信仰を求めしものならんことをも疑へり。支那内地の政治經濟に關する研究として「算學啓蒙と元代の物價」(中村久四郎、歷史地理)は算術の書によりて數學以外にの智識を求めんとし、元代の物價を一瞥して元史食貨志、元典章

と比較し、「元代鈔法の得失と其の結果」(宥高巖、史林)は元代に於ける鈔幣通行並の失敗なりしことを論じ、「明初蘇州府の田租に就きて」(清水泰次、歷史地理)は明代に天下の十分の一を占めたる蘇州の田租を説き、「支那古田制の研究」(加藤繁)は主として周及び其以前の土地公有別度を研究の對象とし古代の典籍に含まれたる土地制度に關する記述を考證し、後魏、北齊、後周、隋、唐の諸朝にて土地公有制を復興せし時の制度を參考し、現時の支那に及ぼせる影響を釋れ、支那以外の諸國に於ける土地制度と比較研究せんとするものにして、現存の載籍に依りて支那古代に於ては耕地は一般民田に共同耕作の行はれし形跡を認め難きこと、宅地及び園圃は民の永業とすることを許されしこと、牧地の公家專用の區域外は民の共同的使用を許されたるらしきこと、山林川澤の產物は公家の用に供する外、一定の制限の下に民に平等に採取せしめしこと、公家專用地の主なるものは藉田、園圃及び牧地などなりしことを論述せり。「竹林の七賢に就て」(宇野哲人、東亞研究)は 學の見地より七賢の特色を研究し其の之を產出せしめし當時の政治、社會を論評し、「明夷待訪錄の思想」(千嘉久、東亞研究)は黃宗羲の學者として大體國家の取るべき方法を如何に見たるや、今日支那に革命を起したるに對する此の思想は佛蘭革命に對する啓蒙思想を起せる以前の思想に比して如何なる程度に

類似し又相反せるやを研究せり。

支那制度文獻の方面にては、「元朝怯薛考」(齋内旦、東洋學報)は元代の近衛軍隊の制度を研究せるもの。「禮部志稿解題」(内藤虎次郎、史林)は從來あまり知られざりし此の禮典の明代外交掌故の大觀にして實に星槎勝覽、西域行程錄の闕を補ふべきのみならず殊域周咨錄等の精確なる掌故の書に見ゆる重要な材料あるを指摘せり。「論語に關する西洋人著述の書史」(中村久四郎、東亞研究)は亦文獻史上有益なる記述なり。「支那研究」は刻下の必要上より現はれたるものなるが、中に「支那人の文藝と保守」(桑原隱藏)「支那の政治」(内藤虎次郎)などあり。「支那及び日本の人口論」(瀧本誠一、經濟論叢)は社會學的見地より支那の人口を論ぜるもの、「支那近代の戸口に就て」(内藤虎次郎、同誌)と共に從來多くは試みられざりし方面なり。特種の研究として「王亥」(同人、藝文)は殷墟書契に見ゆる「王亥」を研究し夏殷人の名は皆、生日の干支を以てし、父子祖孫の同名を嫌はざれども、之を區別する爲に字を加へしこと、干支によれる名は主として廟に於て祭の爲に用ゐられ、干支の名以外に本名ありしこと、王亥は十二支を用ゐし名として知らるゝ最古のものなること等を云ひ、同時に殷人の有せる洪水傳説をも研究論評せり。

支那研究の著書に對する責任ある批評としては「ヒルト、ロツク

ヒルト共譯諸蕃志」(桑原隱藏、史林)及び「柯劭忞新元史帖木兒傳」(桑原隱藏、史林)あり。前者はヒルト氏が譯注に當りての缺點十種をあげ、後者は柯劭忞が折角帖木兒を傳しながら其の文明的面に一言も及ばざるを指摘せり。

外國關係の方面にては「菩薩蠻考」(中村久四郎、史學雜誌)は唐以來久しく支那に交通せし亞刺比亞人の關係を説き、支那文學史上の詞調の名としての菩薩蠻の意義を解き、從來之を以て唐の宣宗の大中年代に入貢せし女蠻國の異風殊俗に緣起せりとせる説を排して、これ *Mussulman* の轉訛ならむとせり、之によりて亞刺比亞人の支那文化に及ぼせる影響を窺ふに足るべく、又以て東西交通史研究上の參考に資すべし。東西交通史上の研究は一昨年来引續き發表しつゝある「宋末の提舉市舶使、西域人蒲壽庚に就いて」(桑原隱藏、史學雜誌)は唐以後に於ける阿刺比亞人の交通の如何なりしこと、阿刺比亞文明の影響如何等の積極的方面を説けるのみならず消極的にも當時阿刺比亞人の眼に映じたる支那人の生活狀態、支那内地の交通、支那都市の情況貿易の方法、乃至經濟狀態にも及び特に宋朝廷に於ての此等外人取締の方法、通商獎勵の有様等をも明らかにせり。此の論文が主として唐宋時代の貿易港として廣東を研究せるに對し「宋元時代海港としての杭州、附上海膠州」(藤田豊八、史學雜誌)は又此方面に於ける貿易港の

研究す。此等貿易港の研究は同時に支那に來りし外國人の旅行記等に見ゆる地名の考證を惹起せり。「イブンコルダトベ」のセントウに就て（同人、同誌）の如きは特に其の研究をカントウなる一小地に卜し、從來學者間に之を以て江郡、光州、膠州等に擬せし説を排して、之を安東の對音ならむとし、諸種の理由より今の直隸省永平府盧龍縣に擬せり。

滿州朝鮮に關する西洋人所傳の地名研究には「シラ島及ゴーレスに就て」（内田銀藏、藝文）あり。こは一昨年來の研究の發表の連續にして、ソレイマンの報演に見ゆるシラは専ら朝鮮半島を指せるものとすることの穩當なること、イブンコルダトベの書のワカツクは倭國にして専ら唐代の新羅國即ち朝鮮半島を指せること、マスーデーのワカツクは亞弗利加の方へ引き附けられ、シラは其の本來の嚴密なる意義に限局して用ゐられず、其の指示する所は擴大せられて朝鮮のみならず、日本をも併せ含める汎稱となりしこと、イドリシーの地理書にはシラは専ら日本群島を意味せること、アブル・フエダ地理書に見ゆるシラは一の想像的國土となれることを論證せり。

滿州方面は從來南滿州鐵道株式會社が歴史地理調査部の事業を東京帝國大學内に托してより其研究報告は「滿鮮歴史地理研究報告」として公にせられたるが、第一卷には勿吉考、室韌考、安東都護

府、渤海考、契丹可敦城考を第二卷にば遼代烏古敵烈考、遼肅古考、金の兵制に關する研究、鮮初の東北境と女眞との關係を含め、此に類似せる研究報告に「滿蒙調査復命書」第一卷乃至第四卷あり。關東部府民政部が滿蒙研究に努力し一は以て統治の參考に資し一は以て學界の爲に貢獻せむとす、其中哲里木盟西北部一帯、黑龍江省の一部遼寧省南部地方、及び赤峰縣治概情等あり。

「再び遼金時代の虜軍に就て」（羽田亨、史學雜誌）は、主として虜字の音韻學上よりの論争なり。「遼代混同江考」（池内宏、東洋學報）は遼代混同江の名の屢々鴨子河の名と混淆し、聖宗太平四年二月鴨子河を改めて混同江とせしことの無意義なるを以て、之が研究を試み、當時鴨子江、混同江二水の名の松花江の如何なる部分に適用せられしかを明かにし、聖宗は鴨子河の全體に通じて混同江の稱を與へんとしたれど、其の後、此の新名は生女直との交通の要路に當れる賓州の渡津にのみ適用せられ、下流は依然として鴨子河と呼ばれしならむと斷定す。「遼代春水考」（池内宏、東洋學報）は興宗以來遼主が常に出遊せし春水の位置を研究せるものにして、金初の春水が狩獵を目的として行はるゝ金主の春遊を意味するに等しく、遼代にても其の意義は、恐らくは同様なりとなるべく、其の位置は鴨子河深の別名ならんと思はるれば大抵推測し

得べしとせり。「定安國に就て」和田清、東洋學報は宋史に見ゆる定安國を研究し、女眞國と密接の關係ありとこより、之を以て渤海遺衆の女眞部落たりとこを推測し、其所在を故の渤海國西偏の方隅に當り、鴨綠江流域地方に占據したるものなるべく、宋人之を以て馬韓種とせる説の誤なることを辯明せり。「元朝秘史・蒙文札記」(石濱純太郎、東亞研究)の研究は此の書の語學上の研究に利用せられざるを慨し、巴と必答、亦訥と阿訥、亦と宣察罕と合罕等に言語學的研究を試みたり。「滿洲觀」(幣原坦)は滿洲に對する見識を見るべし。

中亞及西亞細亞方面の研究は端なくも多大の論争を惹起せり。一昨年以來の大宛國の貴山城問題は本年に入りて「大宛國考」(白鳥庫吉、東洋學報)の發表となり、依然として Kasan 説を保持し Kindjend に擬するの理由なきをいひ、これに對して「再び大宛國の貴山城に就て」(桑原隲藏、史學雜誌)は更に Kasan 説に反駁を加へたり。貴山城に就ては從來學者間に五説あり、貴山城の位置決定は單に其のみとせしめ興味深きのみならず、又之を基として他の幾多不明の地點を決定推測するに重大なる關係あるものなれば、此の論争は有益なるものなり。之に加へて「大宛の貴山城と月氏の王庭」藤田豐八、東洋學報は Kasan, Kindjend 兩説と所見を異にし貴山城を Kasan に擬すると共に、貳師城も亦

Kasan 城なりとの説を立て、大月氏の王庭に就ては Samarkand 説あるを排して、大月氏を被嶺中、特に Wakhsh, Panj 兩河間の Kindjend 地方に其本據を有せし國として、王庭を今日の Irtysk 附近又は其の南の某地に求むべしとせり。「藤田君の貴山城及監氏城考を讀む」(桑原隲藏、藝文)は更に此の説に對して反駁を加へたり。

「西遼建國の始末及其の年紀」(羽田亨、史林)は大石の遼を去りし年より北庭都護府に駐るに至りと迄の事情、回鶻王畢勒哥の招致、忽兒珊との戦等を探り、大石の即位と西遼の年紀を研究し、結局遼史所載の西遼開國に至る迄の記事は寧ろ正確なるを認め、反つて年次の記載の順序の整頓せざる爲め曖昧を來せるものなるを考證したり。「喇嘛族の西遷について」(重松俊章、歴史地理)も此の方面の研究にして、此の研究には支那印度波斯、東羅馬の史料を必要とするが、此は主として支那印度波斯、東羅馬の史料を以て、紀元五世紀前半の嚙唎族は貨利習彌を根據として、藥殺水(Sir)より烏諸水(Amu)に至る大地域を併有せしこと、四五〇年前後に至り、薩撒朝より Balh 靺鞨地方を奪ひ、大夏の Balh 市に根據を遷せること、並に遂に南は雪山を踰りて迦畢試(Capisa)犍陀羅(Gandhara)地方を侵略し五世紀末に西北印度に侵入せしことを比較的詳細に研究せり。之に關聯して「月氏の故地と其の

西移の年代」(藤田豊八、東洋學報)あり、月氏の故地を以て一時は東方に蔓延して殆んど今の甘肅省涼州に及びしも、其の西移前の故地は敦煌を本據として天山に及びたるることなし、咽嚕即月氏説を保持して、西移の年代は西紀前一六〇年頃とする説の目下動かし能はざるを主張せり、「同鵠文女子寶渡文書」(羽田亨、同誌)は喀喇和卓附近にて得たる文書の研究にして、文意によりて賣却者の側にて作成したるものなるを知り、四人の證人各記名捺印して契約の保證に任じ、且つ之を代書せる者は賣却者に三度文意を實して後書了せる旨を記せるを見るは支那の形式に據るることなるべしといへり。

西亞細亞、印度方面の研究は主として交通史の研究となりて現はれたり、「波斯灣の東洋貿易港」(桑原隲藏、史林)、「宋代の層檀國に就て」(藤田豊八、同誌)は其の主なるものなり、兩者互に密接の關係を有せり。就中前者の主眼とする所は從來 Hirth 民が Hina を以て後漢書安息國の條に見ゆる于羅國に擬するの妥當ならざることを指摘し、于羅國の反りて Ubulia ならむを云ひ、Hina としては舊唐書西域傳、新唐書西域傳に見ゆる夏獮城に擬定するの妥當なること、賈耽の皇華四達記に見ゆる末羅の Manā なることを云ひ、此の方面の研究に一步を進めたり。而して此の方面の研究は近頃 Chavannes Rockhill 兩氏共譯の趙汝适所撰諸蕃志に於て

幾分確實なる研究の結果を得たるが、我が邦に於ても此等の諸新研究の發表と東西學者の注意するもの多きは學界の慶事なり。之に對して後者は從來の學者間にては Hirth, Rockhill 兩氏が層檀國を以て始めて Zanguehar に擬し宋史外國傳に見ゆる層檀は諸蕃志に見ゆる層拔ならんことを妥當ならすとして層檀は寧ろ Seljemen Turk を謂へるものならんとし、之に附隨して勿巡が Oman の首都を波斯人の呼びたる Maxon の音譯なること等の新研究を發表せり。

支那の歴史地理的研究は常に是のみに非ざるなり。或る點にては神話の如く、或る點にては實在の如く、模稜の間に出没せる支那古代人の考へたる西域地方の研究も亦支那古代史研究上に興味深きもの、「崑崙と西王母」(小川政治、藝文)は其の試の一なり、此に於ては主として經史以外の資料に就きて其の最も古き概念の如何なるかを探り、之を西洋古代の類似の思想と比較せんとするものにして、崑崙傳説は支那にては頗る古く戰國以前より行はれ、秦漢の間に西域遠征なごありて、其の内容漸次神話化せられたるを想像し、セミラミス傳説、希臘に存せる西王母來賓と類せる傳説等と比較し、西亞細亞の傳説が西方より入り來りし事の信するに足るを論述せり。

藝術的方面に於て「印度藝術の東亞に及ぼせる影響に就て」(瀧精

一、國華)は中世以前に於ける印度藝術を研究し、犍陀羅藝術の東亞に及ぼせる影響の有無、犍陀羅藝術以外の印度藝術にして東亞に影響せしは如何なるものなりやの二問題を考究し、東亞に其の感化を及ぼせるは單に犍陀羅藝術のみに留らず所謂中印度藝術の感化の大なるあるを見、實物を以て比較研究するも、東亞へは始よりして中印度式の佛教藝術の多く傳はりしは明にして、犍陀羅の感化は中印度式中に交はりて間接に傳來せしもの多からんと立論せり。「山東省に於ける南北朝及び隋唐の彫刻」(關野貞、同誌)は既に南北朝に於て我が邦に傳來して奈良時代の様式の根本となりし一種の様式と北魏式と二流派の存在せしを論證し、「支那の建築に就て」(伊東忠太、同誌)は支那建築の特色を論述せり。

「林邑樂に就て」(津田左右吉、東洋學報)は奈良朝より平安初期に我邦に行はれる林邑樂の今、曲名、樂器、舞の一切不明なるも菩薩、迦陵頻、倍體、鉢頭四曲の之ならざるやを吟味し、更に後世に以上の四樂に加へて所謂林邑八樂と稱するものがあるが、概して西域系統のものにして、林邑樂と關係なきことを論證せり。

因に近頃英人ハードン氏は支那研究特に美術方面に興味を有し、夫人羅詩の勸によりて巨資を投じて藝術叢編を公刊し、考古學に關するものを收めて間月一冊を出だしつゝあり。學術叢編は月刊にして既に三冊を公にせり。主なる論著は「敦煌古寫本諸經校勘

記」(羅振玉)「流沙簡牘考釋補正」(王國維)「大元馬政記」等あり。「支那歷代帝后像」は南唐殿舊藏の古帝王聖賢圖像を底本とし一玻璃版に附す、唐以前は后像なし胡敬所撰の南唐殿圖像攷と比較研究して興味あるもの、「麗元至正本中吳紀開六卷」は宋の史明之の撰にかゝり、「南宗衣鉢」清朝書畫譜」亦藝術史的の研究に好材料を提供せり。(那波)

「西洋史」昨年の西洋史界に於ては、一般的性質の著述として、其後半期に及び、單に教育上の參考書たるに止まらず、學術的價値の多大なる述作が相前後して公刊せられたり。「西洋時代史觀、中世」(大類伸)及「西洋上古史」(村川堅圃)の兩者即ちこれなり。

前者は封建時代を中心として、歐洲中世の文化諸現象に亘り其實相を捉へ、これを綜合的に其根底たる社會全生活の心理より解釋し、時代の普遍的面目を流暢なる筆致を以て活寫したるものにして、後者は西洋に於ける上古史研究が日進月歩須臾も停滯せざるに關らず、我國に於ては猶同々陳腐なる舊知識が散布されつゝある今日、最新の研究に據り極めて嚴正なる態度を以て史實を取扱ひ、勉めて浮誇を避けたる實質簡素なる文體を以て上古諸民族の隆替興亡社會生活の真相を叙説したるものなり。右の外既出の「西洋通史」、「西洋全史」を一層完整し、E. H. Carr ならしめたる「西洋通史」二卷(瀨川秀雄)は舊著に比し益々便益適切なる良參考

書なるべく、一昨年より引續き發刊せられたる「通俗世界全史」(早稻田大學出版部)の叢書は趣味多き物語風の文體を以て、各時代の歴史譚を綴れるものにして、一般讀書界に西洋史上の知識を普及せしむるの効あらん。

特殊問題に關する論著としては、最近世史就中時局に對する史的研究其大半を占めたり。是等の間に於て特に注目すべきものを舉げんに、「大戦外交上の論争點」(原勝郎、外交時報)は公表文書史料の批判運用により、且つ Hist. Zeitschrift 誌上に掲げられし Burgstesser 氏の論文を批評の對象として、大戦外交に對する著者の見解を表示せるものにして、「史料としての交戰諸國公表外交文書」(同人、史學雜誌)は同じく各國公表文書が史料としての性質價值を比較論定せるものなり。「歐洲大戦勃發前後の列強外交」(長岡春一、外交時報)は現戰局發展の順次を逐ふて各國外交の經過を叙述せるもの、「最近の巴爾幹問題」(林毅隆、三田學會雜誌)は土耳其、勃牙利、及希臘に於ける協商側と獨逸との外交策を論評せるものなり。「植民地整理に關する大戦前の英獨協商」(箕作元八、外交時報)は Sir H. Johnston が英國王立地理協會の講演にて發表せる所に據り、大戦勃發以前アフリカ整理問題に關する英獨協商が既に成立しつゝありし事實を紹介し、國家膨脹に對し本國と植民地との地理的關係の重要なるを論ぜるものにして

「民族主義に關する獨逸思想の變遷」(同人、同誌)は民族主義を呼號して興れる獨逸が、今やその國策上これを脱して民族集合主義に傾かんしつゝあるを述べ、民族主義及國家の大理想に對する著者の意見を發表せるものなり。

佛革命以後、一般最近世史の方面に於て「大陸封鎖の今昔論」(箕作元八外交時報)はナポレオンの對英政策を論評し、現時の逆封鎖と對比せるもの、「諷刺畫にあらはれたるナポレオン」(中村善太郎、史林)はナポレオン時代の各國諷刺畫を研究し、この方面より列國民の思想感情の推移を窺へるものなり。「獨逸先帝の陣中日記」(村川堅固、史學雜誌)はフリードリッヒ三世の皇太子時代に於ける善奧並佛兩戰役當時の手記を研究せるものにして、該日記發表の由來真偽の問題、日記に現れたる先帝の性格を叙述せり。

「獨逸の東方策及び研究」(坂口昂、大阪朝日新聞)は獨逸の世界政策上の最要部たる東方策が貴重なる學術的研究と相提携せる實相を、實地見聞せる所に基いて叙述したるものなり。アラモの戰(志賀重昂、史學雜誌)はテクサス獨立戰役の發端たりしアラモの戰が、米國勢力の太平洋地方到着の濫觴にして日本開國史に關係深きを論ぜるもの、「諸方面から觀たビスマルク」(齋藤文藏、歴史地理)はビスマルクの性行に關し諸種の觀察を試みたるものなり。「佛國に於ける社會黨統一の沿革」(桑田熊威、國家學會雜誌)は佛

社會黨各派の分立及統一の經過並に其將來を論ぜるものにして、佛政治界に於ける社會黨の位置實相を明かにせり。

近世史上にては「ザルブルグ移住民」(長壽吉、史林)あり。プロイセン王のザルブルグ移住民招致の顛末、該政策の政治史的、文化史的意義を略叙した。中世史に關しては、「西洋中世史を讀みて」(大類伸、東亞之光)は統一、割據兩勢力の消長を以て中世史觀の樞軸とせるものにして、「西洋時代史觀中世」の序説として著者の見識を窺ひ得べく、「中世文學と佛蘭西の國民性」(太宰施門、東亞之光)は史詩、諷諭詩、教訓詩に現れたる中世文學の特質が佛國民性の發展の基礎を示せるものなる所以を説けり。古代史方面に於て特に注意すべき論著に接せざりしは吾人の遺憾とする所なり。

文化史關係の論文としては「十八世紀末フランスに於て常用したる穀物及び果物に就て」(坪井九馬三、史學雜誌)あり、大革命時代の共和暦に見ゆる名稱に基き當時の常用穀物及び果物を擧げ、これを我國語名に當て、且其元產地、移植傳播並に言語上の考證を試みしものなり。「西洋に於ける都市の變遷」(今井登志喜、歴史地理)は都市に對する歴史的研究の諸方面を擧げ、次で古代中世近世各期に於ける都市の特質等に就ての概觀を論ぜり。傳記に關するものとしては「ラムプレヒトを憶ふ」(坂口昂、史林)ある。

す先生略傳」内田銀城、經濟論叢)あり。前者はラムプレヒト氏の生涯を觀察し、時代周圍との關係に着目しつゝ、その學說史觀の發展推移する徑路を精叙し、其事業風貌を偲べるものにして、後者はマルサス氏に關する根本會料、諸研究の比較考究によりて氏の經歷學問上の位置、學風、及性行を叙述したるものなり。〔植村〕「考古學」考古學は昨年には當に新資料の増加と是れに關する研究の盛なりとのみならず、斯界に二個の注意すべき出來事を見たり。其の一は即ち九月十一日勅令を以て京都文科大學に新に考古學講座が創設されしことにして、三月下旬歐洲留學より歸朝せる濱田同大學助教授が之を擔任すること、なれり。他は前年來識者の注意を惹きたりし古蹟發掘保存の事か本山氏により衆議院に請願さるゝあり、また「歴史記念物の保存」(濱田耕作、大阪毎日新聞)出で、當局及び世間の注意を促し、從來奈良縣其他一二地方に於て僅に實施せられしに止まれる調査保存に關する事業が昨年にありては朝鮮總督府、關東都督府初め大阪、鹿兒島、熊本、神奈川等の各府縣に續々起りて之に關する特別の規定を設け、又調査報告を出だせるもありと事なり。殊に朝鮮總督府に於ては大規模の調査機關を設置して關野黑板兩博士、今西谷井兩學士、鳥居龍藏等の専門家に囑し各道に亘る學術上の發掘調査を遂行せしむることとなり、その一部は昨年に實行を見たり。從て是等機關により

最も價值ある確實なる資料が續々發見さるべく、考古學研究の機運大に動きつゝあり。

先づ遺蹟の方面の研究報告より見るに、本邦の石器時代に關するものとしましては「美濃加茂郡河岐の石器時代遺蹟」(柴田常惠、人類學雜誌)は附近の地勢より、遺物發見の狀態の特種なるを指摘してその遺蹟は恐らく先住民の炊爨場なるべしと云ひ、石器時代の遺蹟には後來知らるゝ外に此の種類あるを注意せるもの「筑前國絲島郡今津の貝塚」(中山平次郎、考古學雜誌)「姫路の貝塚の發見」(小西孝三郎、人類學雜誌)は共に新に發見せる貝塚の報告にて、前者に於ては一種の彌生式系統の土器伴ひ出で、發見の石斧が多く半成品にて製作の順序を示せるは遺蹟の石斧製造地なるを推知せしむるものなりとせり。「玉類・簪及彌生式土器を混出する石器時代の遺蹟」(笠井新也、人類學雜誌)は一昨年の發見に係り、畿内に稀なる豊富なる遺物包含地に後代の玉造の跡を混ぜる攝津國加茂村の複雑なる遺蹟を記し、「常陸福田介城篇」(高島多米治、同誌)「同推家介城篇」(同人、同誌)は共に其の由來、發掘の歴史、遺物の特質等を説きて古く有名な兩貝塚の綜括的記述をなせるもの、また陸前國里濱貝塚の遺物は日本遺蹟遺物圖譜に依り紹介されたり。肥後國下谷城郡豊田村の貝塚、相模國小田原の遺物包含地の二は新に踏査研究せられし所にして、後者は彌生式土器を

混出せり。此の彌生式土器の性質・時代等は近時學者の興味を惹きつゝ、あれば上舉の諸遺蹟は本年度に於て更に研究せらるべし。喜田博士・上田三平氏踏査の越前國東十鄉村の遺蹟は石器なくして、彌生式土器が玉類の破片及び齊簪を混じて出土する特種に屬す。

昨年に於ける古墳及び之に關聯せる遺蹟の調査は各地に亘れるが特に九州方面が學者の注目を惹きて種々なる新事實の發見あり、從來不明なりし薩隅肥の考古學上の遺蹟が大に闡明さるゝに至れり。即年初内藤博士・今西學士は南九州を調査して、薩摩に古墳土器を見、肥後國江田古墳に於て石人を發見し、三月喜田博士は大隅國肝屬郡東串良村に於て百數十の古墳群集を調査して薩隅に天孫族の遺蹟なしとの從來の通説を破れり。七月には柴田常惠氏主として肥後の各地に散在する彫刻ある古墳の調査を試み、高橋健自氏は北九州に於ける銅劍銅鉞發見の遺蹟を研究したり。同地方の特志家殊に北部にありては中山博士また之が調査に従事して種々の結果を得たり。是等の一部は「九州古墳瞥見」(内藤虎次郎、大阪毎日新聞)「遺物遺蹟上より見たる九州古代の民族に就て」(喜田貞吉、史林)となり、後者は九州の遺蹟遺物に西北海岸地方と東南岸とは明に系統を異にせるを概論せり。「大隅國大崎村瓢形古墳及び其埴物に就て」(瀬の口傳九郎、考古學雜誌)「大隅中部地方

に於ける古代遺蹟四則」(同人、歴史地理)は共に同地の新遺蹟を報ざるもの、後者に於て肝屬郡西串良村岡崎の石棺を有する土墳の存在を記せり。「銅劍銅鐙考」(高橋健自、考古學雜誌)は其の(一)(二)(三)に於て是等出土の遺蹟を最も詳細に述べたり。是の外九州地方の古墳に關するものは「筑後三池郡上楠田の石神山」(柴田常惠、人類學雜誌)筑前國筑紫郡雜餉隈驛近傍の堅穴「中山平次郎、考古學雜誌」等あり。一は墳上に石人あり、三個の石棺を埋せる特種の遺蹟を記し、他は類例多からざる堅穴群の報告なり。なほ此の方面の遺蹟に就ては昨年一部人士の間に漢委奴國王印の出所に關して論争を見たり。即漢委奴國王印の出所に對する遺蹟學的研究(笠井新也、同誌)出で、舊記錄より、是れを一種の古墳なりと認め前年發表せる中山博士の隱蔽說に反對せるに端を發し、「漢委奴國王印の出所は古墳に非ざるべきを出張す」中山平次郎、同誌)は之に對して金印發見者の口上書を根據として古墳たるべからざるを明にせるが笠井氏自説を固執し爲に辨駁數次に及びり。

其他の地方に於ける古墳の研究は、關東に「常陸吉田東の彫刻ある一古墳」(柴田常惠、人類學雜誌)あり。一圓塚の石墳壁に武器類を刻せる頗る珍さすべきものなり。當代の遺蹟の中心たる畿内にては奈良縣史蹟勝地調査會報告書(第三回)に「磯城郡多武峯村大

字栗原字小谷俗稱ハナヤマ西塚」(高橋健自「山邊郡丹波市町東乘鞍の古墳」佐藤小吉)「南葛城郡秋津村大字條の古墳」(西崎辰之助等あり。前者は其の後部に小石室の附加せる特種の壙式墳にして、後の二者は瓢形墳の後圓部に存する横穴式墳及び内部の棺の形式を記述せり。また同書には前後に羨道を有する「高市郡眞弓の鐙子塚」の石墳の實測圖を載す。「山城綴喜郡茶臼山古墳と其發掘物」梅原末治、考古學雜誌)「河內國山田村二子塚調査報告」(同人、人類學雜誌)は共に前年度に發掘せし遺蹟の構造遺物を報告し「大和國佐味田寶塚の構造と其の出土の古鏡に就て」同人、考古學雜誌)「河內枚方町字萬年山の遺蹟と發見の遺物に就て」(同人、同誌)は遺蹟の構造を記して出土の鏡より其營造の年代の考定を試みたり。中國に於ては「備中筋田村大塚調査報告」同人史林)四國には「讃岐國大川郡津田岩崎山古墳」(長町彰、考古學雜誌)「松山市附近の石器散布地及古墳墓所在地」(横地石太郎、伊豫史談)等あり。後者は石器時代を併せて主として古墳の分布と形式を概語せるなり。「滋賀縣の古墳」(遠山荒次、人類學雜誌)は同縣下に於ける遺蹟の表示にして「美濃太田町大塚發見の各種の遺物に就き」(林魁一、同誌)は此の圓形古墳より封土中に石器・彌生式土器等の混入せしを報じたり。この外にては日本遺蹟遺物圖譜が昨年度に於て同名の會より創刊して、羽前・上野・河内・伊

賀・美作・豊前・豊後・筑前・肥後等各地の遺蹟を正確なる圖に依りて世に傳へたり。就中豊前京都郡黒田村大字中黒田綾塚の如きは今日調査をなして得る最大の墓墳なり。

是等遺蹟の發掘は各地に行はれたるが、偶然の發見に係るもの多く、從て研究上寄與する少なきを憾まざるを得ず。たゞ數年前より漸く行はれ來れる科學的の發掘が一月宮崎縣西部原第三號塚の内藤博士・今西學士に依りて實行せらるゝあり、十月上田三平氏が若狹國脇袋の西塚を調査し、共に興味ある結果のありしこと世に傳へらる。後者は年末考古學雜誌上に報告を見たり。

古墳と關聯して次に同時代の遺蹟の比較的多く調査せられしは、窯跡なり。「製陶史上の大遺跡」(岩井武俊、大阪毎日新聞)「伊勢國河藝郡合川村の上古窯址」(大西源一、考古學雜誌)「飛騨國吉城郡國府瓜集の窯址に就て」(柴田常惠、飛騨史壇)「播磨國津萬井村末谷に於ける古代製陶所の遺蹟及び遺物」(笠井新也、考古學雜誌)「攝津櫻井谷古代窯址に就て」(櫻井義彰、同誌)等は其の主なる報告なり。前二者は同一の遺蹟の記述にて、其の遺蹟の饒多なると釉藥を施せる陶片の出づるを注意すべく、攝津櫻井谷の窯址は前年度に現はれたる報告の缺を補へるものなり。

以上一般古墳調査の概要を見たが、こゝに特筆すべきは古墳内部構造の主体をなせる棺槨、墳の名稱に關する論議が前年に引續き

盛なりし事となす。「石棺石槨及び墳を論ず(二)」(高橋健自、考古學雜誌)出でて主として石槨を論じ、棺弓の文を引用して支那の古制の槨即ち我が古墳の石室に當るを主張し、墳は字義より從來の横穴是れなり縱墳また往々例を見ることなし、「六朝以前の墓埵に就て」(野貞、同誌)は埵に現はれたる文字より此の問題に觸れ、墳は支室を、槨は墳の周壁を指せば石槨なる從來の稱呼は誤ならずとせり。「滋賀縣の古墳」の説または是れに同じ「横穴は墳に非ず」(八木井三郎、人類學雜誌)は大體「石棺石槨及び墳を論ず」の説に賛成を表せるも、横穴即墳説は誤解なりと論じ、槨の二形式を區別するに「附石槨口なし石槨と呼ぶべし」と定義す。是等の諸説に對し「高橋野兩君の槨と墳との説に就て」(喜田貞吉、考古學雜誌)は石室即石槨説は、其引證せる槨弓の文に誤あるを以て其の説は打破せらるべきものなりと云ひ、棺弓の「公室視豐碑」の條を引きて我が石室即墳なるを明かにし、槨即支室周壁説に對しては墓埵は必ず墳壁のみを築造せしものなりとの豫斷の成立せざる限り學術上の價值なきを述べ、また横穴非墳論は記錄の誤讀なるを指摘し、更に又「棺槨墳再辨」(同人、歷史地理)に於て、棺の字義を論じ、先に「石棺石槨及び墳を論ず」の(一)に於て發表の石槨説を評論して、かゝる石造物は正に槨と呼ぶべしと細述せり、の論文は未完にて猶論戰を本年に遺したり。「親棺槨原義」(長

井金風、同誌)の說後者に同じ。

上代に於ける古寺址に就ては奈良縣史蹟勝地調査會報告書に添上郡山村廢寺、生駒郡廢經昇寺址、高市郡廢定林寺、同廢柏隈寺址、南葛城郡水野廢寺址等の調査報告(天沼俊一)あり、「河内野中寺の堂塔の礎石」(梅原末治、歴史地理)と共に遺蹟の正確なる狀態を示せり。「奈良市頭塔山の石佛」(佐藤小吉、奈良縣史蹟勝地調査會報告「同地獄谷調査報告」(新納忠之介、同書)また當代特種の遺蹟の調査にして、殊に前者は方形封土の四方に十二の奈良時代の石佛を配置せる興味あるものの詳細なる報告なり。

朝鮮方面の遺蹟の調査は、昨年朝鮮總督府に新に特別の古蹟調査機關を設けられ、各専門家が其囑托を受けて八九月の交より渡鮮して調査に従事せるは既に述べたるが、關野・黑板兩博士・谷井學士等は主に大同江附近の樂浪・高句麗時代の墳墓の調査を試み、大同江面に於ける樂浪郡時代のものよりは種々の遺物を發見して大に同地方文化の跡を明にし、今西學士は開城及び江華島附近の遺蹟を、鳥居龍藏氏は中央朝鮮に於ける人種學上殊に原始時代の遺蹟を各探求して各専門學上の研究を行ひ、半島の遺蹟は昨年に比して一層鮮明となれるが如し。半島史編纂の爲同じく渡鮮の三浦博士また開城・平安南道及び慶尙南道の一部の史蹟を調査せり。「大同江附近の古墳」(黑板勝美、朝鮮叢報)は同地調査の概要を記

し、大阪毎日紙上の鳥居氏の通信、亦其の一斑を窺ふべし。其の詳細は本年度に於て公表されん。この外北朝鮮の遺蹟につきては「北朝鮮に於ける石器時代遺蹟」(八木排三郎、京城日報)あり。南鮮には「新羅寺蹟考」(諸鹿央雄)あり。後者は久しく慶州にありて其古蹟に通ぜる著者が同地の寺址及び其遺物に關する根據ある記述なり。

支那方面に就ては滿洲方面に「關東州原始拾遺」(立花小一郎)あり。同州に於ける發見遺物の性質を記せるもの、本土にありては「前漢の陵墓に就て」(足立喜六、考古學雜誌)は當代の陵墓の形式に三種あるを云ひて現狀によりて之を區別し、埋藏の遺物を併論せり。九月より小川博士は有高學士を隨へて滿洲山東省方面を旅行して南滿金州に於て高麗時代の遺蹟を調査し頗る興味ある發見ありと聞く。

歐洲方面に於ては濱田學士が滯歐中調査せし遺蹟を多く紹介した。り。「セリモンテ石切場の遺蹟」(史林)「ギリシア建築と自然景」(大阪朝日新聞、等)にして、前者は伊太利に於ける此の遺蹟が紀元前四〇九年の光景を歴然と傳へたるを示せるものなり。

轉じて遺物及び是れよりの歸納的研究の概要を見んか、我が國にありては勾玉・土器・銅劍・銅鉾・銅鏃・船舶等に關する研究と其の人種學的觀察を見たり。勾玉の石器時代に關するものは主に系統

論にて「石器時代の勾玉に就て」(高橋健自、人類學雜誌)はその或種のものは日本人が先住民の嗜好に適應する如く製作せるもの、從て彼等の勾玉を使用するは固有の風に非ず大和民族に學ぶ所ありとなりとし、「原始勾玉の研究」(大野雲外、同誌)は之に反して古墳勾玉は貝塚勾玉の系統を引けるなりと論じ、日本太古の交通(喜田貞吉、日本交通史論)また此の點に論及して後説を主張せり。古墳時代の勾玉に就ては「各種の勾玉」(柴田常惠、人類學雜誌)と「異形の勾玉」(和田千吉、同誌)あり。一は諸種の石質形狀の勾玉を舉げ之を概論せるにて、他は往々出土する異形の正確なる資料を列舉して其の用途を考へ、また手持勾玉と稱する遺物の十數の發見地を記し古墳より出土せず、恐らく一種の儀式に用ゐしものならんと云へり。土器に就ては既記の如く所謂彌生式土器が學者の注意を惹き、此の種の器は石器時代より永く其式を傳へて古墳期に及べる事を推測せられたり。此の外にては瓷器に關し一二の論著と九州方面に於ける「特種の器片の研究」(考古學雜誌)とあるに止まれり。

「銅劍銅鐔考」(高橋健自、考古學雜誌)は未完なるが、昨年現はれたる研究中最も注目すべき論文にして、先づ形式の分類を試み、古記録に現はれたるそれを論じて、各種の遺物發見の狀態・遺蹟の分布、同時の發掘品の有無に最も意を用ゐ、これを基礎として

て種々の歸納的研究を得たり。「銅劍銅劍に就いて」(同人、國學院雜誌)は別に其の梗概を記せるものにて、用途は多く儀式用なるべきも、實用の武器もあり、單獨に出づるものは宗教的意味にて埋没せるならんと推し、使用の人類は熊襲なりと論じて、從來の研究に比し一段の歩を進めたり。其の詳細は本年に至り現るべし。鏡鑑の研究は主として漢三國六朝等古式のものに對してなされ、「日本出土の支那古鏡」(富岡謙藏、史林)は我が國出土の支那鏡を圖樣形式に依り分類して、その各の年代を考定し、一般鏡鑑の沿革を辿ると共に我が古墳墓平代の研究に資せるもの、「鑑鏡の起源」(同人、藝文)は主として經書に依りその起源を論じ、「古鏡の銘について」(山田孝雄、人類學雜誌)は年號鏡を標準として銘文より推して六朝以前の支那鏡の年定を推考せり。「海獸葡萄鏡に就いて」は支那鏡中一種の特色ある此の鏡の圖樣的起源發達を論じて、六朝以來行はれし葡萄紋樣に從來の四神鏡四獸鏡等の意匠を加へ、イラン系統の感化を以て成れりと云へり。而して近時「古鏡圖譜」(羅振玉)出でて重要なる新資料を載せ、また續々支那方面より遺品の將來するあれば、本年に於ては更に興味ある研究を聞くを得べく、本邦古墳年代の如きは此の研究を待ちて決定せらるべし、既に昨年に於て此の方法に依り墳墓の年代を考定せる二論文を見たり。上古の竈に關するものは「小谷沼發見の剣片に就

て」は學界の問題となりし常陸國同治發見の木造物を古代剝舟の形式に比して其の剝舟なるを斷じ、「銚切船越神社所藏の剝舟」と共に日本造船史ト北方系に屬するものとせし、「無目簞考」(「葦船に關する研究」)「埴土舟に就ての疑」以上、西村直次「人類學雜誌」の三編は記紀に見ゆる昆等船の名稱より構造を推し、類例を世界の各地に求めて、南方系統に屬すを定め、何れも是等を通じて我が上古の人類學上の問題を解決せんことを新しき試みなり。

遺物遺蹟を基として企てられたる我が古代の綜括的研究には「古代の日本民族移住發展の徑路」(鳥居龍藏、新日本)あり。最古の住民はアイヌにして北方系統の如く、固く日本人は朝鮮方面より既に古く石器時代に本土に來住し彼等の遺物が彌生式土器なり之に黒潮に依り來れるインドチシアン、銅鐸を遺したる印度支那派が移り住して日本民族が成立せるなりと結論せり。記述通俗的なるも、本邦のみならず、四周の遺物遺蹟の調査を根底となして科學的に立論せるは考古學上注目し値す。「日本太古の民族に就いて」(喜田貞吉、史學雜誌)は同一の題目なるが、文獻上の研究を主とし遺物遺蹟を參考に供したるにて、前者と研究的立場を異にせり。先に挙げし「遺物遺蹟上より見たる九州古代の民族に就て」また同様にして遺蹟遺物が如何に現はれたるかを觀察せしものなり。

歴史時代に屬する遺物には「古瓦類雜考」(中山平次郎、考古學雜誌)あり。九州北部に於ける古瓦の遺品を精密に記錄して新事實を示す多し。「深田の石塔、附、大分社其他の石塔」(宇佐燈籠)(以上、天沼俊一、同誌は大分縣下に存在する兩者の形式手法を論じたるものにて、奈良縣史蹟勝地調査會報告書に載する石燈籠石塔類の報告(天沼俊一)と共にまた注意すべき記事なり。和鏡に就ては「法隆寺西園堂の奉納鏡」香取秀真、美術新報あり。新に發見せる年號の墨書ある鏡の報告なり、また上代の美術史に關しては「法隆金堂の壁畫に就て」瀧精一あり。保存調査の爲め昨年委員會の設けられたるは一般遺蹟調査上注意すべき現象なり。支那の方面にありては、既記の鏡鑑研究の外に於ては、上代の藝術的方面及び金石學上の論文を多く見たり。「支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾」(關野貞、東京工科大学紀要)は、總論に於て當時の墳墓の形式を論じ表飾の概要を説き、最も意を諸墓石に用ゐて孝室山・武氏祠・兩城山を始め各地の遺品を美術考古學の方面より詳細に觀察して様式・手法の綜括をなし、碑に就ては穿等の研究を試みたるものにして、百數十の附圖を有す。「六朝以前の墓塚に就て」(關野貞、考古學雜誌)は漢魏兩晉時代の墳墓營造形式を記し、表面に現はれたる文字・文様・手法・年代等を論じたるものなり。美術彫刻の系統論に「印度藝術の東亞に及ぼせる影響」(瀧精

一、國華）「佛像の美術史的研究」(松本文三郎、哲學研究)初め數編を見たり。昨年に於ける最も注意すべき研究の「なるが今は國史、東洋史の記述に譲りて説かず。金石學上に於ては「岐陽石鼓に就いて」「毛公鼎銘考」(以上、林泰輔、書苑あり、共に支那に於ける有名な遺品の研究なり。また六朝時代の古碑にある穿に就て一の論争を見たるが(書苑)後世利用説は實物の精査を缺きたるものなりき。以上の諸論著の他に昨年に於ては羅振玉氏に依りて、考研學上の注意すべき遺物の圖譜が續々刊行されて、之に附せる氏の研究と共に大なる裨益を學界に與へたるは特筆すべき事なり。即ち「金泥石屑」「古器物範圍錄」「殷虛古器物圖錄」等にして、「殷虛古器物圖錄」は同じく昨年出でて龜板獸骨に刻せる文字を釋すべく十數年の苦心を完成したる「殷虛書契考釋後篇」「羅振玉」の大著と相待ちて支那上古史研究上の標準となるべく、有名な殷虛の性質を鮮明になせるものなり。

西洋の遺物としては「希臘羅馬の素燒土偶」(濱田耕作、大阪朝日新聞)は簡單ながら其の様式の變遷を明示せるものとして學ぐべく、「新發見のアフロチテ像」(同人、藝文)は亞弗利加キレチ發見の其の像の美術史的觀察にて年代を論ぜるもの、他に於ては古代の美術殊に繪畫の或物が紹介研究せられたり「希臘有史以前の繪畫」(大隅爲三、美術新報)「レキートスの繪に就て」(上野直昭、同

第二卷 昨年の史學地理學界

誌)「白色」レキートスの繪畫(大隅爲三、同誌)の三篇是にして、何れもその圖樣を現はせる意味及び手法を紹介批評せるものなり。最後に考古學と特殊の關係を有する諸學科を一瞥せんか。人類學方面に就ては其の考古學と關連せる既記の諸研究以外、松本彦七郎氏と長谷部博士の間に支那河南發見の薦骨に就て體質人類學上の意見の交換あり。紋章學の分野に於ては「通俗紋章學」(沼田賴輔、大阪毎朝新聞)の一般論を外にしては主に巴紋の研究を見たり。即ちTirthの「支那及び日本の裝飾に於けるMander及びTritiumに就て」が紹介され(考古學雜誌)「外國の巴紋」(原田淑人、同誌)は廣く海外の例を挙げ「巴紋考」(沼田賴輔、同誌)は本邦に於ける家紋としての來由を考察せり。而して「巴紋の起源に就て」(松島惇、同誌)はその起源を支那に求めたり。金石學の方面には「棟札研究の價值」(沼田賴輔、同誌)の一編を外にしては斷片的報告多きを占む。土俗學上の研究には「郷土研究」のりて誌上に柳田國男氏其他人士の興味ある研究報告を見るも、今は省略に従はん。(梅原)

地理學界

概況 歐洲戰亂の影響により海外の出版物殊に獨逸の各雜誌の吾人の手に入るもの漸く減じ、未だ學界の全般を窺ふに足らざるも、唯最も著き現象としては何れも戰争的色彩を帶へることにして

戰爭に關係ある題目多し。又英佛のものを通じて獨逸側の學界を窺ひたる所によれば依然として活氣を失はず、各方面に於て研究を續け居る中にも地理學を軍事に應用し、又軍事上の機會を利用して斯學の研鑽に資せんとする努力は特に盛んなるが如し。次に昨年中に行はれたる主なる地理上の探檢としてはシャツクルトンの南極へ、及びオーレルスタインの中央亞細亞へ向ひたるあり。

前者は風波と流氷とに襲はれて失敗に終りしも、後者は其第三回の探檢として、一九一五年よりせるもの、昨年中に入りては波斯セイスタン支那の西域印度等にて古代の遺跡交通路等の新發目多かりき。尙物故せし地理學者はペトログラード大學教授氣候學地理學の泰斗にして其著「世界の氣候」等にて學界に貢獻せしウガエイコフ、皇立地學協會々長として南米探檢に名あり英國地理學界の重鎮たりしサー、クレメント、マーカーカム。米國地質調査所技師チャールス、ウエラード、ヘイス。火山學者として有名なるジョンウエスレージャット、及び英國地質調査所技師にして炭田調査に名を知る、クロフ等なり。就つて内國の學界を通覽するに歐洲の學界が戰雲に鎖さるゝに反し、極めて平穩にして、外來の著作等に依頼せずして幾分獨創の研究の興らんとする傾向を生じたるは慶すべきなり。各部門に亘りて何れも相當の進歩を見たるが、就中歐洲戰亂に促されて、軍事地理學研究の曙光を見たると、近時漸く

勃興せる登山趣味の普及と共に、山岳の踏跡殊に其地貌に關する研究、及び歐米に於ては既に舊き問題なる地形が空氣の作用特に氣候の推移によりて著しく變化を受ける方面の研究、國內の各地方誌並に新占領地殊に南洋の自然及び人文地理學的研究及び近年の著しき噴火によりて活氣を呈せる火山研究が漸く完成の域に達したること等を最も著しき現象とす。

自然地理學

としては地質學の内特に地理學に關係深きものには「地層中の氷層に就きて」(山崎直方、地學雜誌)あり、シベリア北部等の凍土帶の地方の地下の氷層たる地氷を露國の地質家ゾロノウワツチ同トール、トルマチエフ、ラマンスキー等の諸説を批判して從來餘り顧みられざりし氷の累層を六層に分ち併せて氷期との關係をも明かにせしものなり、「土壤學講義」(大工原銀太郎)の上卷には土壤の生成種類等一般的の記述の外、日本土壤概論なる一篇あり、本邦土壤の成因上の區別より内地各地方の分布朝鮮臺灣・滿洲・支那・蒙古の土壤に及び、地質との關係及び地力等に就き説明せるものなり、此種のものには從來「日本土壤學」、「日本地產統計」二書共恒藤規隆ありしのみなれば、學界に貢獻する所大なるを認む。南洋領有以來引續き活氣を呈せる珊瑚礁の研究としては諸種の古生代珊瑚の性質、時代、分布等を詳論せる「日本朝鮮及び支那の古生代珊瑚」(矢部長克、早坂一郎、地質學雜誌)

を第一に推すべく、其他「デーヴィス對テリーの珊瑚礁論」(辻村太郎、同誌)、「淺海珊瑚の生態」海底の地形と珊瑚礁問題、「フイシー諸島の珊瑚礁と地殻の變動」(早坂一郎、同誌)等あり。

次に地形學一般として「大陸の單元に就て」(山崎直方東洋學藝雜誌)は地質時代の古期より常に變遷ある世界の各地塊を正負兩單元に分ちユーラシアを始め各大陸の場合に就き古代地理の形勢を述べ今日の大陸の生成は幾個の地塊が或は離れ或は合したる結果に外ならず其各地塊には何れも正負兩性質あるを明かにせしもの「分水線による地形圖の吟味」(徳田貞一、地質學雜誌)は三河風來寺山の分水線を例に取り分水線を基として地形圖を讀破する方法を述べたり「ジョニンソンの平原説」(小林房太郎、地質學雜誌)は氏の説を紹介し平原に對する諸家の説を集め主として地形の輪廻より平野平原及び準平原の三とし殊に所謂準平原なる術語の使用法を明確にしたる點を取るべし「河蝕三稜石」(徳田貞一、地質學雜誌)は筑後の矢部川河礫中の三稜石を取り其性質を述べ之に簡單なる説明を附したるもの從來風蝕によりて此種の形狀を生ずるは定説なるもかく河の蝕によるものも全くなしとは限られず著者も幾分疑問を挾めるが如くなれば今後の詳細なる研究を待つべきものとす。山岳研究並に登山案内に關するものは山岳趣味の普及と共に近時に於ける特産物の一にして後の地方誌の項中に入るべきも

もの之に關するの大部分を占む。今便宜上一般登山に關する記事を擧ぐれば「平ヶ嶽登攀記」(高頭義明、山岳)「赤石岳から虻見岳まで」(小倉伸吉、同誌)「東侯より虻見岳に登る記」(守島五郎、同誌)「蒲田谷より穗島登山」(中野善太郎、同誌)「燧ヶ岳より飯豊山まで」(志村烏嶺、同誌)「淺間山の初冬」(冠松次郎、同誌)「伊吹山雪中登山」(越馬境、同誌)「南湖大山方面探検記」(野呂寧、同誌)「スイス日記」(辻村伊助、同誌)「赤石山」(ドーンント、同誌)「秩父の旅」(南日重治、同誌)「三峯より白岩及雲取越へ」(辻本滿丸、同誌)「甲武信岳と奥千丈岳」(森喬、同誌)「武藏嶺志山岳篇」(河田震、同誌)等あり、以上は「スイス日記」を除き、多くは山案内記を所謂山岳文學的に叙述せる非科學的のものなるが、其間に地貌溪谷の有様植物地理等を窺ふに足るものなきにあらず、中には登山地圖、山又は谷の寫眞あり、何れも極めて技巧に重きを置かるゝも、見方によりては斯學上の參考となるものあり、又一般登山案内の書も濫發せられしが、「登山の心得」(山林局)は小冊子ながら、登山の準備實行、遭難の三項に分ちて、陸地測量部、農商務省の経験家の材料を集めたるもの、近時不用意に深山に分け入りて難に遭ふもの頻々たるを慨し、是等の登山者の爲めにせし懇切なる參考書なり、飛驒山脈、木曾山脈、赤石山脈を通じての俗稱日本アルプスに關するものは部分的のもの、全般のもの等、殆んど枚舉

に遠なき程なるが、就中「日本アルプス登山案内」(矢澤米三郎、河野齡藏)は此種のもの通弊に陥らず、登山は著者の實査を本とし、植物に關する事項の豊富なるを必要なる地圖と多くの學術上價值ある寫眞を加へたるを多とすべし。但し繁簡不整なる外最近の事項を缺ける嫌あり又學術上の項も植物にのみ偏して、岩石地質構造及び地貌等に關しては貧弱なるを憾みとすべし。

日本の氷河問題に關しては「再び梓川溪谷島々附近の地形に就て」(大關久五郎、地質雜誌)は大正四年末の同名の論文の續稿にして大正三年の同誌所載「常念山脈南部に於ける氷河作用に就て」(小川琢治、田中秀作)に對する駁論なり、梓川溪谷の地形を詳説して氷蝕の痕跡毫もなく、所謂ヘットナー石なる擦痕ある岩塊の氷成をも認めず、此等の岩塊及び附近の堆積物は水成か山崩れか雪崩れかに歸すべきなりと結論せるもの、之に對して「信濃梓川溪谷に於ける氷河遺跡に就て」(田中秀作、同誌)出で、更に前説を反駁し、地形の多くは變化して往時の跡を留めざるにしても、へ氏發見の岩塊の如きは形狀、性質に於て歐米の漂石に比して特色なければ、是を以て一時的の地變に歸する不合理なりと論ぜり、又「梓川上流上高地盆地附近の地形に就て」及び其續稿、並に「飛驒山脈の中心に横はれる雙六、三俣山塊の地形に就て」以上、大關久五郎、地質學雜誌)は相次で出でしが何れも地方誌の部に入る

を適當とするもの、其中多くの氷成地形端堆石、圓頂丘、ゾール乃至山岳の斜面に於ける圈谷及び氷蝕の爲めに圓く剝磨せられし地形等を指摘せり、かくて「日本の氷河問題」同人、山岳も發表せられたり。こは昨年五月日本山岳會に於ける講演の筆記なるが、中に日本の氷河問題の混沌たる狀態にある原因として問題の性質、學者の態度、世人の氷河地形に關する誤解の三を挙げ、之に對する氏の立場を明かにせり、之を要するに、氷河問題は既に有無の境を脱して、其分布及氷期の區分等に入れる時に當り高山性の地方又は高度高き幽谷盆地等に局限せんとする小規模の氷河説と溪谷氷河又は或る部分にては氷室、氷原等をも承認せんとする大規模の氷河説との相對立する氣勢を示しつゝあり。

火山學の方面には「日本の火山」(小藤文次郎、地質學雜誌)を第一に挙げざるべからず、本編は從來の研究日本火山概説、火山の分布、北日本中帶火山、飛驒山脈の火山脈、瀬戸内及び九州中部火山帶に分ち日本の地質構造上より火山系を分ちて詳論せる權威ある大論文なり、又「大正三年前の櫻島」及び「大正三年櫻島噴火の特徴」(以上、同人、同誌)あり櫻島に關する論文は從來際物として其當時又は遅くとも噴火後半年又は一年位の間に續出せるが、中には發表を急ぎて粗簡の評々免かれざるものなきにあらず、右の二の如きは最も著實なる調査の後に成れる極めて精密

なる研究とす其他櫻島に關しては地學論叢の「櫻島火山」(大森房吉、佐藤傳藏、石川成章)最近の櫻島に就ては「櫻島の近況等」(地質學雜誌、佐藤傳藏)「櫻島の近況」同人、地學雜誌「櫻島の現況」(船水鐵五郎、同誌)等あり、又地震の方面を主として論ぜるものには「櫻島の噴火及び地震」(大森房吉、震災豫防調査會報告)ありこは日本に於ける火山噴火の時の分布櫻島噴火の歴史、大正三年噴火時の氣象上の條件、櫻島噴火に伴ひし音波の波及、噴出せる火山灰の堆積及び運搬、噴火による鹿児島灣水位の不規則なる變化、噴火による土地の垂直及び水平の轉位等ヲ論述せるもの、精密なる地形圖、地震關係の諸地圖圖表等も此種の群を抜けるものとす、尙其他には「伊豆三原山噴火概報」(同人、同報告)「所謂阿蘇岩の來所」(徳田貞一、地質學雜誌「箱根溫泉調查報文」(佐藤傳藏、地質調查所報告)「大正三年秋田縣仙北郡大地震調查報文」(今村明恒、碧海康溫、大橋良一、震豫報告)「東京地震の回数に就て」(大森房吉、東洋學藝雜誌「臺灣近年の強震に就て」(同人同誌)等の諸研究あり。

人文地理學 の内經濟地理學の方面に「日本鐵道の社會及び經濟に及ぼせる影響」(鐵道院なる大篇あり、其内容の豊富なる上、其關係を示せる附圖一卷の如きは外國にては實に嚆矢の舉といふも可なり、唯國有鐵道を主としたれば、私設線其他の運輸機關と

の關係不明の嫌あり、前者のみにて結論せるは聊か危險なき能はず、其他此部に於て稍見るに足るものは「世界に於ける鐵礦並に石炭の分布及び其供給如何(井上嘯之助、地質調查所報告)」「石炭の主産物及び副産物の性質及び用途」(清水省吾、地學雜誌)「本邦に於ける鐵工業(井上嘯之助、同誌)」「大正四年本邦外國貿易の趨勢」(外務省「最近三年間鐵鐵の世界產出額」(井上嘯之助、地學雜誌)「支那に於ける電氣事業」(高橋本枝、同誌)「内外の製鐵事業に就て」(齊藤大吉、工業化學雜誌「紙の話」(中村恒、中央公論)等なり。

軍事地理學として我が學界に先鞭を著けしは「戰爭の地理的意義及び其研究に就て」(小川琢治、地學雜誌)にして、從來の軍事地理學が陸戰のみにて海戰を含まざる極めて狹義のものにして、而も實用を主として非科學的なるを慨し、之を人文地理學的に研究する方法に就きて意見を述べ、併せて新學上より戰爭の性質、區別、分布等を考察せるものなり、「歐洲戰局の地理學的考察」(同人中等地歴教員會講演錄)は前論文の趣旨によりて歐洲の戰亂地を地學的各方面より見たるもの、次に「黃河下流平地の戰略地理的意義」(同人、地學雜誌は顧炎武及び顧祖禹を基とし、歴代の史實によりて同地域を觀察したるものなり。

地方誌 中「知底半島地質調查報文」(門倉三能、地質要報)は其地

形、交通、地質の三に分ちて詳述せるもの、殊に第三紀層は石狩、天鹽、北見諸國の上部同紀層に該當し、半島の主軸たる中央山脈は千島火山帶の一部にして、硫黃山及びツニシベツの二火山は第三紀末の火山活動に便宜なる噴出路をなせしを明にせり。「下北半島」(佐藤傳藏、地學雜誌)も精密なる實測の結果として尊重すべく、「朝鮮半島西側の地貌」(小川琢治、史林)は秋風嶺を以て界とする西側の地域が東側と趣を異にし此方面が中生代以後の湊成層を缺き、第三紀以後に地盤の昇降なりしこと、日本群島と異なる點にして、流水浸蝕作用の微々たるも極めて長き時期の風蝕の爲め削剝せられたる老朽地貌を呈する點を指摘せり。

南洋に關するものは前年に引續き、豊富なるが中には、寧ろ濫發の誹を免れざるものなきにあらず、其間に從來頗る明瞭を缺き、學術上不便多かりし南洋なる語を各方面より周密に考察して其意義を明確にしたるものに「南洋の意義」(内田寛一、史林)あり、學術的に而も平易に紹介せる此種のもの、權威たる「我が南洋」(山崎貞方)あり、又南洋新占領地視察報告(専門學務局)中の主要項には「重力偏差測定」(松山基施、金子秀吉)「疾病の調査」(梶林兵三郎)動物學的方面の調査(石橋榮達)「自熱及び人文地理上の調査」(内田寛一)「植物調査」(河越重紀)「殖民政策方面」(小出滿二)等見るべきもの多し、次に所謂馬來南洋に關するものには「閩領東

印度事情(通商局)、以前の瓜哇事情に加除改竄を施して改題したるもの面目一新多くの有力なる資料なり、其他に「呂宋島見聞記」(近藤眞澄、東洋學藝雜誌)「南洋通航」(保坂彦太郎)、「瓜哇ミゼレベス」(八木實通)、「北ボルネオ」(三穗五郎)等あり。支那の方面にて權威あるものには「支那本部の區劃」(小藤次郎、東洋學藝雜誌)「黃河水源問題」(小川琢治、史林)「江西省撫河流域及び福建省閩江流域の地形」(山根新次、地學雜誌)を推すべく、「最近支那貿易」(東亞同文會)「滿洲概要」(滿洲會)「蒙古旅行談」(岩波六郎、地學雜誌)「湖南省鑛產地」(小山一郎、地質學雜誌)等の内容中には地理學の資料なるもの少からず、其他の方面の外國地誌に關する内、主として旅行踏査によりて成れるものにては沿漢洲「ウラジオストック地方旅行談」(神保小虎、地學雜誌)「露領沿海州東岸の諸嶺山」(同人、地質學雜誌)「ハンガリー事情」(脇水鐵五郎、地學雜誌)「加奈太ニューコン州殊にクロンダイク砂金地」(井上昭之助、地質調査所報告)「ブラッルの農業」(片岡謙、地學雜誌)等を推すべく、列國の經濟地理としては米國研究獨逸研究、支那研究、露國研究等の各中の産業、交通等は資料を供給するもの少からず。(田中)